

## 「空手道で一番苦しかったこと」

受験日：平成 29 年 9 月 16 日

月心会 西東京本部 浜田山支部

須 藤 由紀子

現在高校 2 年になる娘と月心会に入門し、早 6 年が経過しました。入門を考えたきっかけは、娘が古武道を習いたいと言ったことでした。そして、家の近くで稽古を行っていた月心会を見学し、娘の強い希望で私も入門する事となりました。この 6 年間、空手を続けていく上で一番苦しかったことは「練習に通う事」でした。私は看護師をしており、日勤・夜勤とシフトがランダムです。その為、夜勤が朝 9 時に終了し、大急ぎで帰宅し稽古に通うことが度々ありました。ふらふら状態での稽古は、事故が起きないように気を付ける事が第一でした。また、普段運動をしていない為、稽古の翌日は筋肉痛に悩まされ、やっとの思いでストレッチャーを押し患者を運ぶといった日々でした。このような状況の中、空手を止めてしまおうと何度も思いました。

しかし、辛い事ばかりではありませんでした。思春期の娘と同じ目標を持ち、稽古に励んだ時間はとても貴重なものでした。全国大会に親子型で出場するときなど、一体感を統一するよう、よく話し合い練習したものでした。このような関わりは、お互いの良い所、欠けている所を明らかにしながら認め合うといったかけがえのない時間となり、空手を止めたいと思う気持ちを吹き飛ばしてくれていました。月心会に入門しなければ娘との貴重な時間は得られなかったと思っています。現在小学校 3 年生の息子も練習に励んでいます。息子とも空手のお稽古を通し、同じ目的を持ち同じ目標を目指すことができます。私の子育てにはいつも月心会があります。市川本部長をはじめ、段の先輩方や仲間たちは私たち家族のかけがえのない存在であり、いつも感謝の気持ちで一杯です。

今後初段となった暁には、練習に参加させていただくことは勿論、看護師として周りの方々の怪我の処置や管理を行い、自分のできる範囲で恩返しをできたら光栄だと考えております。